

■ 概況

2/17~2/23のNYMEX・WTI先物市場は、91.07~92.35ドルの範囲で推移した。

2月24日は、ロシアのウクライナ軍事侵攻を受けて、一時、朝方の時間外取引で、2014年7月末以来の100.54ドルまで上昇したが、その後、利益確定売りや高値警戒感、投機筋の「噂で買い、ニュースで売る」の姿勢等から、売りが優勢となり、値を削った。4月限の終値は前日比0.71ドル高の92.81ドル。

週末25日は、停戦協議に向けた動きなどウクライナ紛争の早期解決観測、対口経済制裁のエネルギー分野除外観測により、需給ひっ迫懸念は緩和され、4営業日ぶりに反落した。また、ペーカーヒューズ社発表の米国内稼働石油掘削装置は前週比2基増の522基で5週連続の増加。3月限の終値は前日比1.22ドル安の91.59ドル。

週明け28日は、ロシア主要銀行の国際決済網からの排除という金融制裁の決定を受け、エネルギー貿易への影響への懸念から、大幅に反発した。4月限の終値は前営業日比4.13ドル高の95.72ドル。

3月1日は、大幅に続伸し、前日比7.69ドル高の103.41ドルで取引を終えた。一時は106.78ドルと2014年6月以来の高値を付けた。ウクライナ情勢の緊迫が続き、ロシア産の原油や天然ガスの供給が滞るとの見方から買いが集まった。ロシア軍の長蛇の車列が首都キエフに接近しているとの報道もあり、一段の攻防の激化が予想されている。カナダがロシア産原油の輸入を禁止するなど、欧米諸国とロシアの関係悪化が原油需給の引き締めにつながるとの見方が強まった。国際エネルギー機関(IEA)は1日、加盟国が備蓄している石

油を計6000万バレル協調放出すると発表した。ただ、原油価格を抑えるのに十分な量ではないとの見方から、発表後も相場の上昇は続いた。

2日は、大幅続伸し、4月限の終値は、前日比7.19ドル高の110.60ドルと、約11年ぶりの高水準となった。

アジアの指標原油である中東産ドバイ原油/東京市場(4月渡し)は、2月17日~23日の間、90.50~95.50ドルの範囲で推移した。2月24日99.00ドル、25日97.30ドル、28日99.60ドル、3月1日96.90ドル、2日108.10ドルで推移した。

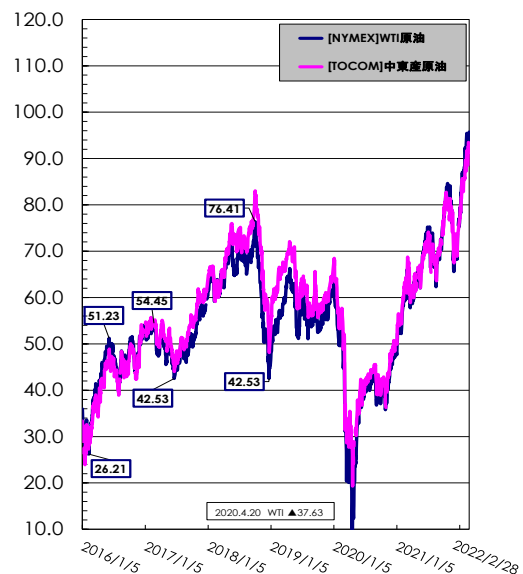
為替は、2月17日~23日の間、114.79~115.48円の範囲で推移した。2月24日114.95円、25日115.57円、28日115.55円、3月1日115.28円、2日115.01円で推移した。

財務省が2月25日に発表した貿易統計(速報・旬間)によると、2月上旬の原油輸入平均CIF価格は、61,109円/klで、前旬比3,752円高、ドル建て84.95ドルで前旬比5.61ドル高、為替レートは1ドル/114.36円。

そのような中で、2月28日時点の小売価格は、ガソリンが前週比0.8円の値上がり、軽油は同0.8円の値上がり、灯油は13円の値上がり(18%ベース)であった。ガソリンは8週連続の値上がり、軽油も8週連続の値上がり、灯油も8週連続の値上がりとなった。ガソリンの全国平均価格は、172.8円と今週からの基準価格(171円)を上回り、引き続き、燃料油価格激変緩和対策が発動されたが、補助金支給額は、前週に続き、上限の5円。

原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	2/20 ~ 2/26	3,024 ▼ -108	▲ -
	トッパー稼働率 (%)	"	78.6 ▼ -2.8	▲ -
	原油在庫量 (千kl)	2/26	9,267 ▲ 213	▼ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	2/28	93.16 ▲ 4.48	▲ 29.7
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	2/28	95.72 ▲ 3.37	▲ 35.1
	原油CIF単価 (\$/bbl)	2月上旬	84.95 ▲ 5.61	▲ 29.09
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	61,109 ▲ 3,752	▲ 24,424
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	114.36 ▲ 0.58	▼ -9.95
	外国為替TTSレート (¥/\$)	2/28	116.55 ▼ -0.49	▼ -9.06

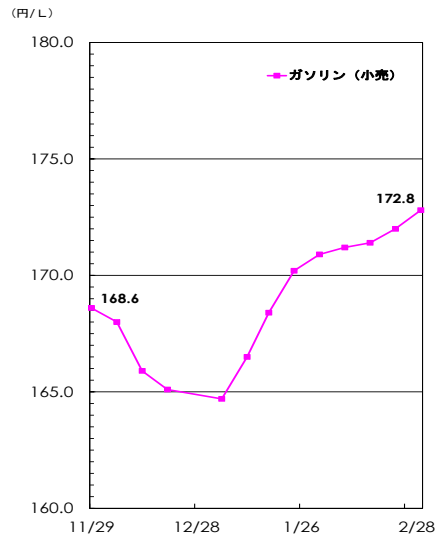
(\$/b)



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/20 ~ 2/26	895 ▲ 41	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	783 ▲ 21	▼ -	
	輸出	"	202 ▲ 128	▲ -	
	在庫	2/26	1,662 ▼ -90	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/22 ~ 2/28	79.2 ▼ -0.1	▲ 23.7	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/22 ~ 2/28	81.1 ▲ 2.0	▲ 26.6
		(TOCOM/中部)	2/28	83.0 ▲ 4.8	▲ 28.0
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/28	172.8 ▲ 0.8	▲ 28.2	

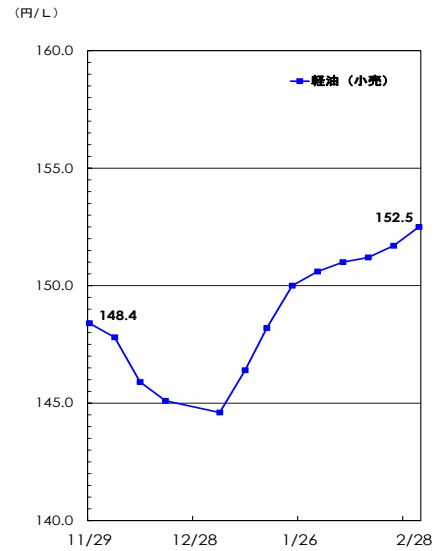
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

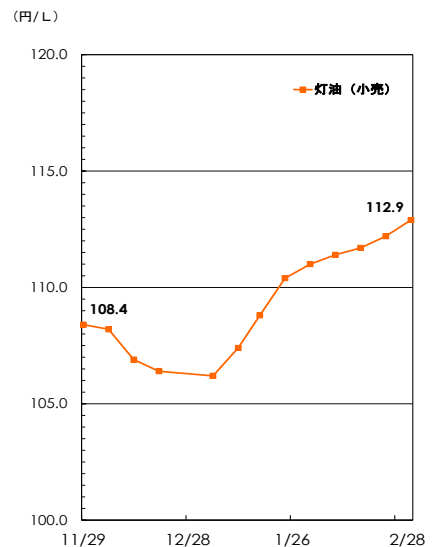
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/20 ~ 2/26	736 ▲ 43	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	576 ▲ 21	▲ -	
	輸出	"	10 ▼ -180	▼ -	
	在庫	2/26	1,445 ▲ 149	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/22 ~ 2/28	81.2 ▲ 0.8	▲ 22.9	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/22 ~ 2/28	85.8 ▲ 1.1	▲ 26.7
		(TOCOM/中部)	2/28	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/28	152.5 ▲ 0.8	▲ 27.6	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/20 ~ 2/26	501 ▲ 168	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	459 ▼ -16	▲ -	
	輸出	"	0 → 0	▼ -	
	在庫	2/26	1,329 ▲ 43	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/22 ~ 2/28	81.1 ▲ 0.8	▲ 23.7	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/22 ~ 2/28	81.1 ▲ 0.8	▲ 24.8
		(TOCOM/中部)	2/28	80.0 ▼ -1.0	▲ 22.5
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/28	112.9 ▲ 0.7	▲ 25.9	



■ 関連情報

1 海外/原油

3月2日のNYMEX先物原油は、ウクライナ情勢を背景とした供給懸念や石油輸出国機構(OPEC)加盟国とロシアなど非加盟産油国で構成する「OPECプラス」が大幅な追加増産を見送ったことで買いが加速して大幅続伸、4月限の終値は、前日比7.19ドル高の110.6ドルと、約11年ぶりの高水準となった。この3営業日で20.8%の上昇となった。5月限は6.85ドル高の107.06ドル。ロシア軍がウクライナへの本格侵攻を開始してから約1週間。ロシアの攻撃は激化している。エネルギー大国であるロシアからの供給が混乱するとの警戒感から原油高が進んでいる。石油輸出国機構(OPEC)加盟国とロシアなどで構成する「OPECプラス」は2日、オンラインで閣僚級会合を開催したが、生産量を毎月日量40万バレル

引き上げる従来方針の据え置きで一致。需給逼迫観測が一段と強まる中、4月限は一時112.51ドルと、2011年5月以来の高値を付けた。

バイデン米政権は2日、ウクライナ侵攻を続けるロシアへの追加経済制裁を発表した。石油・天然ガスの生産に使う機器の対口輸出を規制するもので、原油買いに拍車を掛けた。

EIAによると、2月28日時点のガソリンの小売価格は、前週比7.8セント値上がりの1ガロン3.608ドル(111.0円/ℓ)、ディーゼルは同4.9セント値上がりの4.104ドル(126.2円/ℓ)となった。ガソリンは9週連続の値上がり、ディーゼルは8週連続の値上がりとなった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2022年2月20日～2月26日に休止したトッパー能力は15.5万バレル/日で、前週に対して0.0万バレル/日減少した(全処理能力は345.8万バレル/日)。

原油処理量は302.4万klと、前週に比べ10.8万kl減少。前年に対しては18.9万klの増加。トッパー稼働率は78.6%と前週に対して2.8ポイントの減少、前年に対しては4.9ポイントの増加となった。

生産は前週に比べてジェットが減産、その他の油種で増産となった。ガソリン/4.9%増、ジェット/47.8%減、灯油/50.2%増、軽油/6.2%増、A重油/15.8%増、C重油/47.7%増。今週のC重油の輸入は0.0万kl(前週比0.0万kl減)。軽油の輸出は1.0万kl(前週比18.0万kl減)。

出荷(輸入分を除く)は前週比でガソリン、軽油が増加し、その他の油種で減少した。前年比ではガソリン、ジェットが減少し、その他の油種で増加した。ガソリンの出荷は78.3万kl(対前週2.7%増)と2週連続で増加した。ジェット3.3万kl(対前週72.3%減)、灯油45.9万kl(対前週3.3%減)、軽油57.6万kl

(対前週3.7%増)、A重油25.7万kl(対前週2.8%減)、C重油23.2万kl(対前週2.2%減)。

(単位:千kl)

	今週 (2/20 ~ 2/26)	前週 (2/13 ~ 2/19)	前週比	
ガソリン	783	762	▲ 21	(3%)
ジェット燃料	33	121	▼ -88	(-73%)
灯油	459	475	▼ -16	(-3%)
軽油	576	555	▲ 21	(4%)
A重油	257	264	▼ -7	(-3%)
C重油	232	238	▼ -6	(-3%)
合計	2,340	2,415	▼ -75	(-3%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

2月26日時点の在庫は、灯油、軽油、A重油が積み増しとなり、その他の油種で取り崩しとなった。

前年に対してはA重油が増加し、その他の油種で減少となった。

ガソリンは166.2万kl、前週差9.0万kl減。前年に対しては28.3万kl少ない。

灯油は132.9万kl、前週差4.3万kl増。前年に対しては27.4万kl少ない。

軽油は144.5万kl、前週差14.9万kl増。前年に対しては2.2万kl少ない。

A重油は68.5万kl、前週差1.3万kl増。前年に対しては0.1万kl多い。

C重油は163.4万kl、前週差0.3万kl減。前年に対しては18.8万kl少ない。

(単位:千kl)

	今週 (2/26)	前週 (2/19)	前週比	
ガソリン	1,662	1,752	▼ -90	(-5%)
ジェット燃料	630	736	▼ -106	(-14%)
灯油	1,329	1,286	▲ 43	(3%)
軽油	1,445	1,296	▲ 149	(11%)
A重油	685	672	▲ 13	(2%)
C重油	1,634	1,637	▼ -3	(-0%)
合計	7,385	7,379	▲ 6	(0.1%)

3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

2月22日～28日の指標原油価格は前週比で値上がりし、為替レートはわずかに円安で、元売会社の原油コストは、2.0円値上がりしたものと見られる。

上がりとなった模様。

上記コストアップに加え、前週の補助金額5.0円を加えたコスト上昇額7.0円に、補助金5.0円が支給されることから、次週(3/3～3/9)の元売り会社の実質的な卸価格は2.0円の値

3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

2月22日～28日の製品スポット市況は、2月15日～21日平均と比べ、ガソリンの陸上取引の値下がりを除き、他の油種・取引で値上がりした。

直近週(2/22～2/28)の陸上スポット価格平均値は、前週(2/15～2/21)比で、ガソリンは0.1円の値下がり、灯油は0.8円の値上がり、軽油は0.8円の値上がりだった。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、直近週(2/22～2/28)に、前週(2/15～2/21)比で、ガソリンは、1.1円の値上がり、灯油は0.1円の値上がり、軽油は1.0円の値上がりだった。

先物価格の平均は、前週比で、ガソリンは2.0円の値上がり、灯油は0.8円の値上がり、軽油は1.1円の値上がりだった。

(RIM) (単位: 円/%)

[陸上ローリー 4地区平均]	今週 (2/22～2/28)	前週 (2/15～2/21)	前週比
	レギュラー	79.2	79.3
灯油	81.1	80.3	▲ 0.8
軽油	81.2	80.4	▲ 0.8

(TOCOM) (単位: 円/%)

[期近物/終値 [平均]]	今週 (2/22～2/28)	前週 (2/15～2/21)	前週比
	レギュラー	81.1	79.1
灯油	81.1	80.3	▲ 0.8
軽油	85.8	84.7	▲ 1.1

※上記価格は税抜き価格

参考値 (2/22～2/28実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▼ -0.1	▲ 2.0	▲ 1.0
灯油	▲ 0.8	▲ 0.8	▲ 0.8
軽油	▲ 0.8	▲ 1.1	▲ 0.9
A重油	▲ 1.1		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

4 国内/製品小売価格

2月28日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比0.8円高の172.8円、軽油は同0.8円高の152.5円、灯油は18%ベースで13円高の2,033円(1%ベースでは同0.7円高の112.9円)。ガソリンは8週連続の値上がり、軽油も8週連続の値上がり、灯油も8週連続の値上がりとなった。

次回調査時(3/7)のガソリンの小売価格は、補助金を上回る原油価格上昇が見込まれることから、値上りが予想される。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりは43都道府県、横ばいは1県、値下がり3府県だった。全国最安値は岡山県の166.7円、その次は秋田県と岩手県の168.7円であった。他方、最高値は鹿児島県の180.9円だった。最も値上がりしたのは徳島県(前週比2.1円高)で、横ばいは高知県、最も値下がりしたのは愛媛県(前週比0.2円安)だった。

(単位: 円/%)

(資工庁公表) [週動向]	今週 (2/28)	前週 (2/21)	前週比	直近高値
レギュラー	172.8	172.0	▲ 0.8	08/8/4 185.1
灯油	112.9	112.2	▲ 0.7	08/8/11 132.1
軽油	152.5	151.7	▲ 0.8	08/8/4 167.4

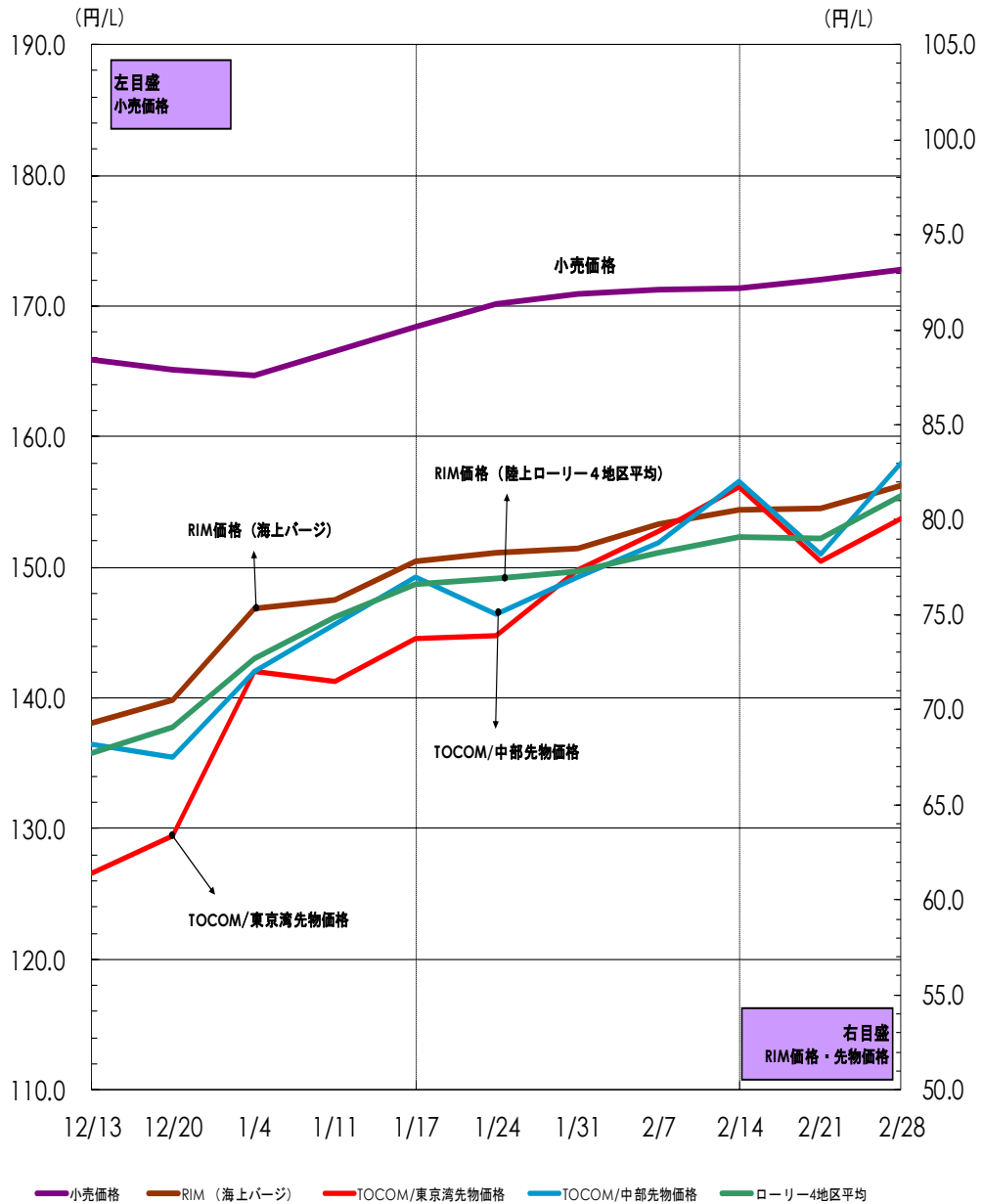
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

ガソリン価格推移

(2021/12/13 ~ 2022/2/28)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。
次回 (2021第47号) の公表は、3/11 (金) 14:00 です。

本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報 (以下、併せて「ドキュメント」) に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター (以下、当センター) 又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層 (特に給油所経営に携わる方々) から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

本レポート掲載データの出所について

①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟 (石連) 「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所 (New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所 (The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限 (翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM (Telegraphic Transfer Middle rate : 中値) を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値) を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社 (一次卸) と系列特約店など (二次卸) との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社 (RIM) 「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用 (いわゆる4RIM価格とは異なる)。

⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾 及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格 (平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格 (平均値)。

⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000 SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用 (資工庁公表)。原則として、毎週 (月) 時点の価格を調査し (水) 14:00に公表 (資源エネルギー庁HPに掲載)。